

石菴記

會席
人
畧式



源氏活花記下

花と沢山よまらふ月雅あわらどがー汁と賞するものあり
根よと伐えらぐとけしり者けりゆゆ言日見も偏座ありて
大道にあらず山谷幽栖ありては四時を富くたましく官命あり
是れがめ小回首乃おむとさう一枝を折て餐應何ぞそ深志かそ
きんや市中にまじしむは味一珠をまを沢山よま生座一
まして書院の歳よ寂莫といふは身一とす故に空沢山小も
生座一少座ある二巻と巻の席よはむ一輪よても活座一時の
直よ陸よとま入るはりよ一む沢山よ生座一とく自伐そのにハ



源氏活花記下

わくびるに 雙林は 樹の心と 伐出て 業々 市店に 齋て
 家命と 繫ぐものあり 心を 伐ハ 神あり 人と 助地あり 草木
 心あり といふも 涼山の 埋木も 世よ 木あり 何を 伐ん 意あり 云
 神に 林と 採佛は 菊と 推成 厥いふを 替冠さるや 又 氣性
 よて 活るが ありて 出生と 知るは 只 陰陽の 室計つふを 抛入あり
 と 是より も 皆在法と ありて ざるを せと 一と 一と よても 出生 故
 肯法と 礼して 八 抛入 生花の 詮あり ありて 小 庭敷 教書 庭を 乃
 花形 又 草木 乃 出生 不 不生と 分て 畺画 一と 初人の 疑惑と 解せ
 一むるなり

梵語曼陀羅華
 蓮華
 本名芙蓉蓮華の
 荷葉と云葉と
 葉と云

好て二花一葉といけるも
 如是の出生ありとの
 此より 俗に あり



水河膏

澤蓬草

水見大新かくに入るに
くさふてむのりしを



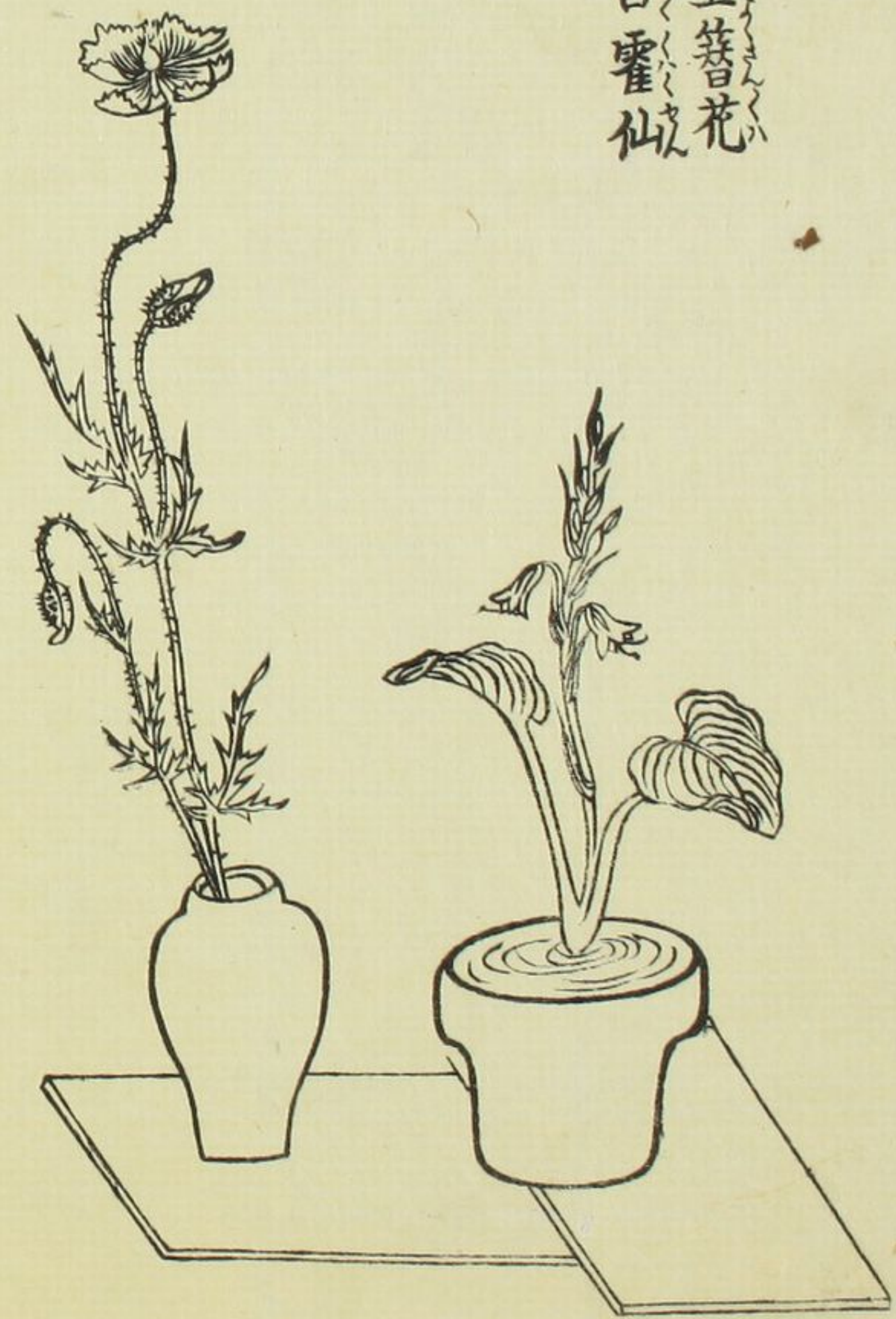
蘭草

沢蓬草
くさふてむのりし



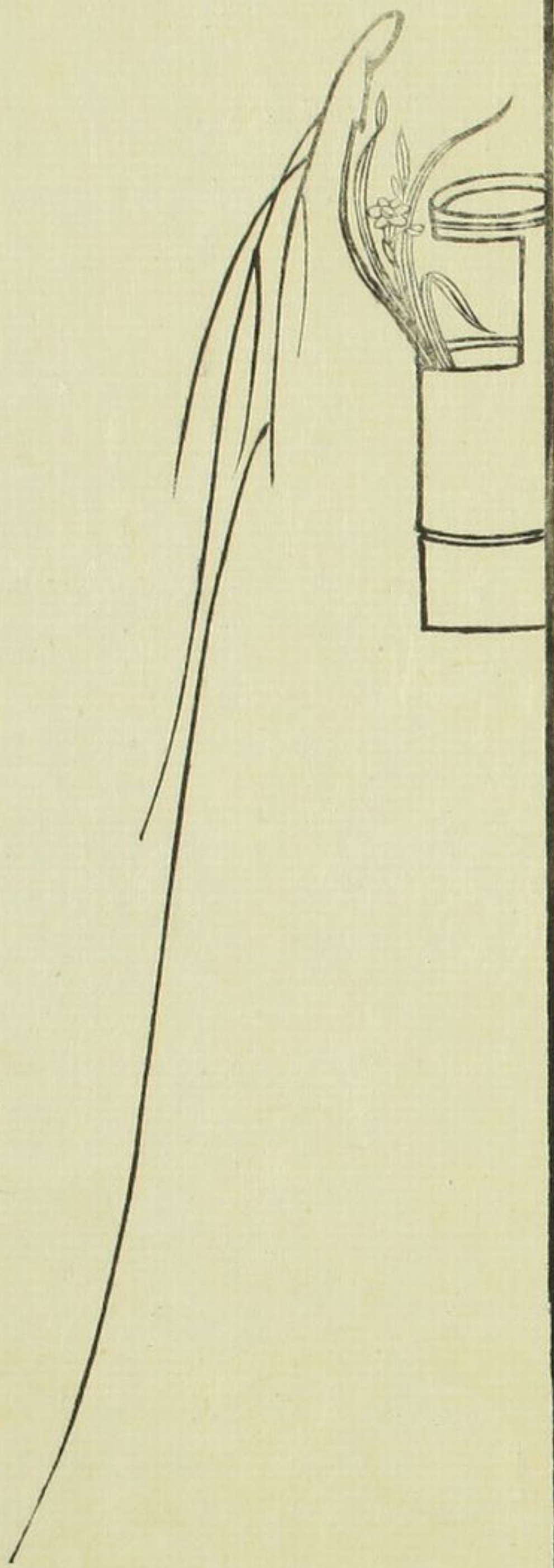
擬法珠 玉簪花 白霍仙

麗春花 花 鶯粟 俗人 負人



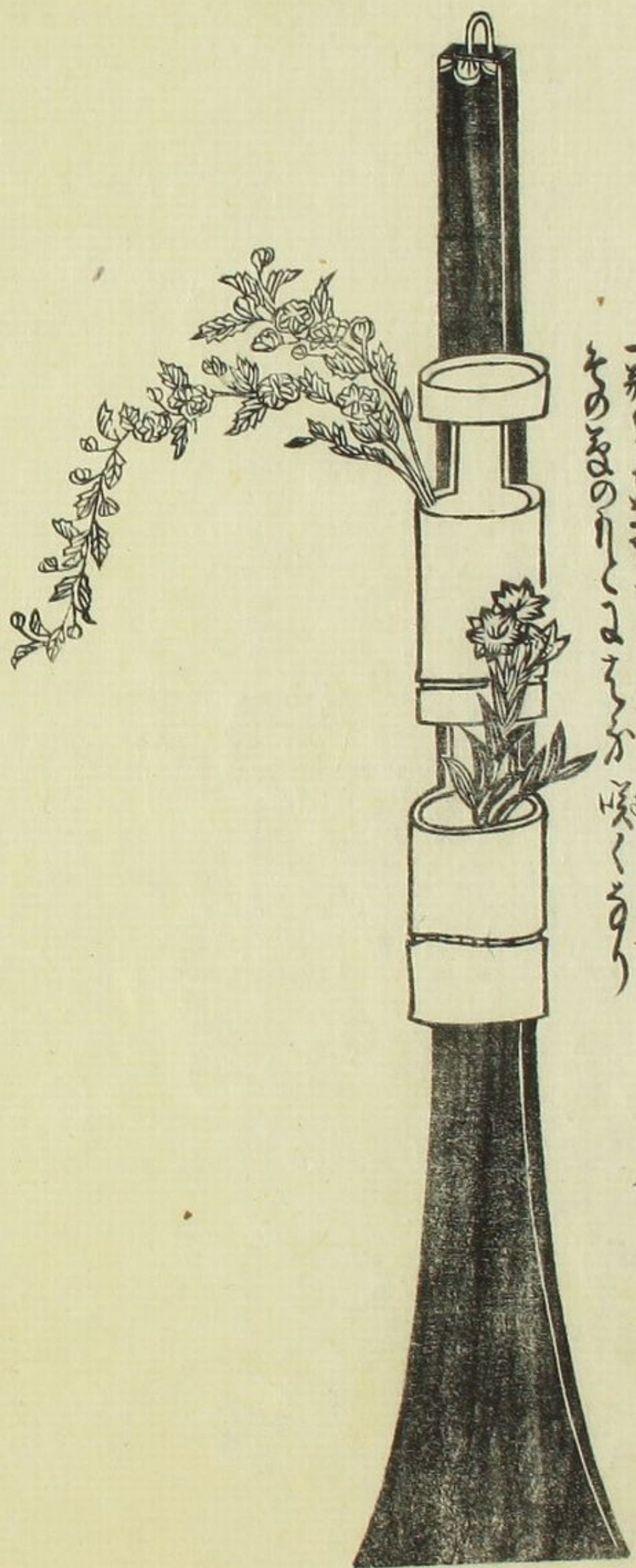
一重切水仙

柳も亦かき下る系柳ハ長く柳よりハ長し系柳ハ葉ヤシク
志切人ハ身を折行さるく折てりけるあり柳とむすひて
いさくらよりハあまの葉ハ柳とて流むの如く不味し一志と
流し同一き一を海むくのちあり



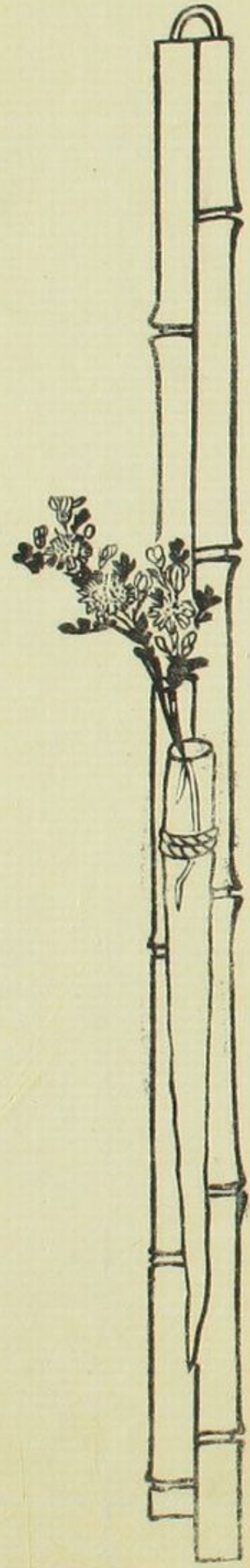
古代形
出撥二重切

上重 棟棠 又 餘醜花 下重 春龍膽
二重切ニツ物瓶ホトシヨ本下ニホトシケル通例アリ
阿波ビの如ク合拵好シクテ本下ノ花ガホトシケル
家にも池ありてあるも半下家にはかり本も平地の
一瓶のうらあそちありて二年切ふて一夫も短
その名の如くはやくはやく



板
岩石
花石
花石



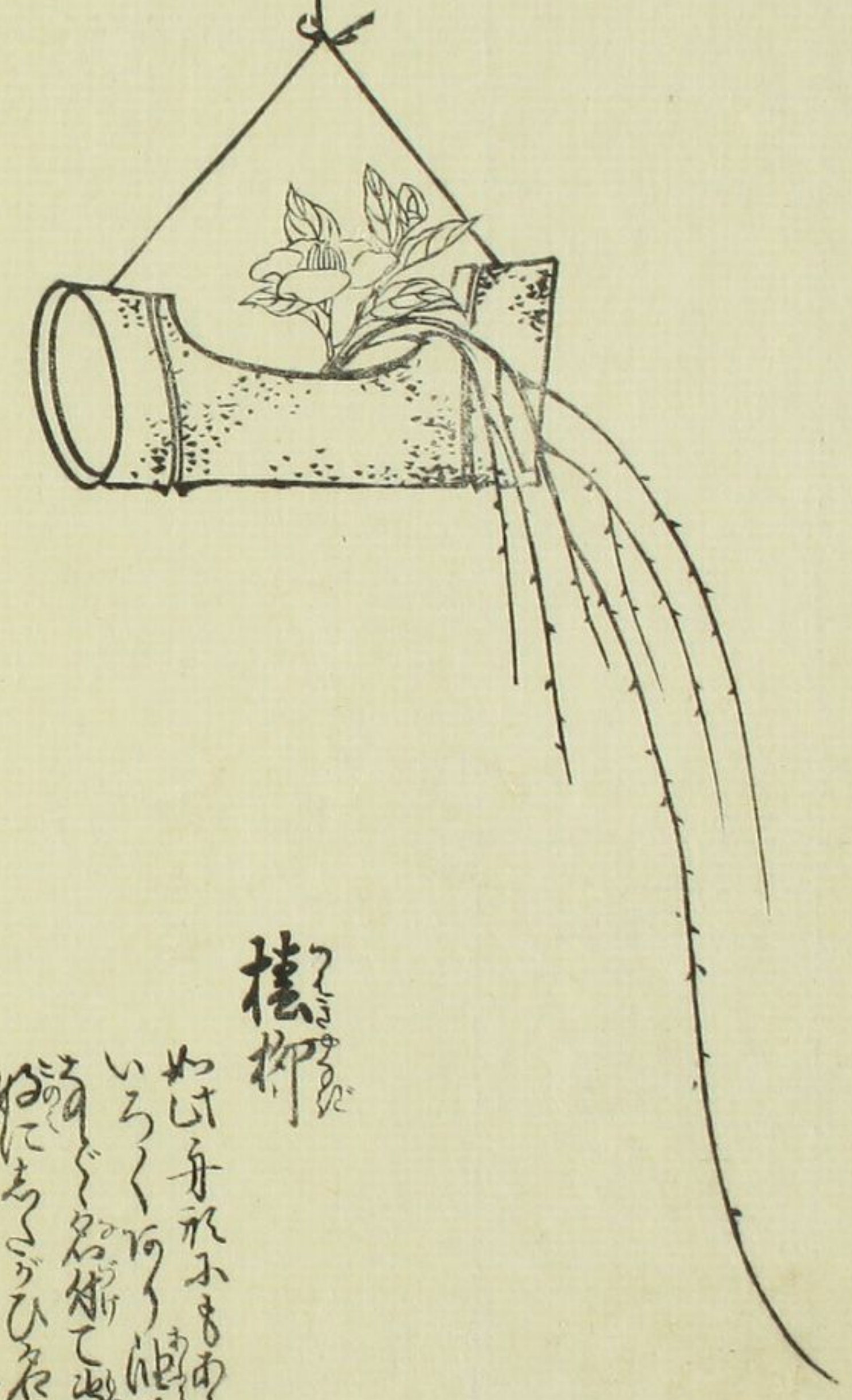
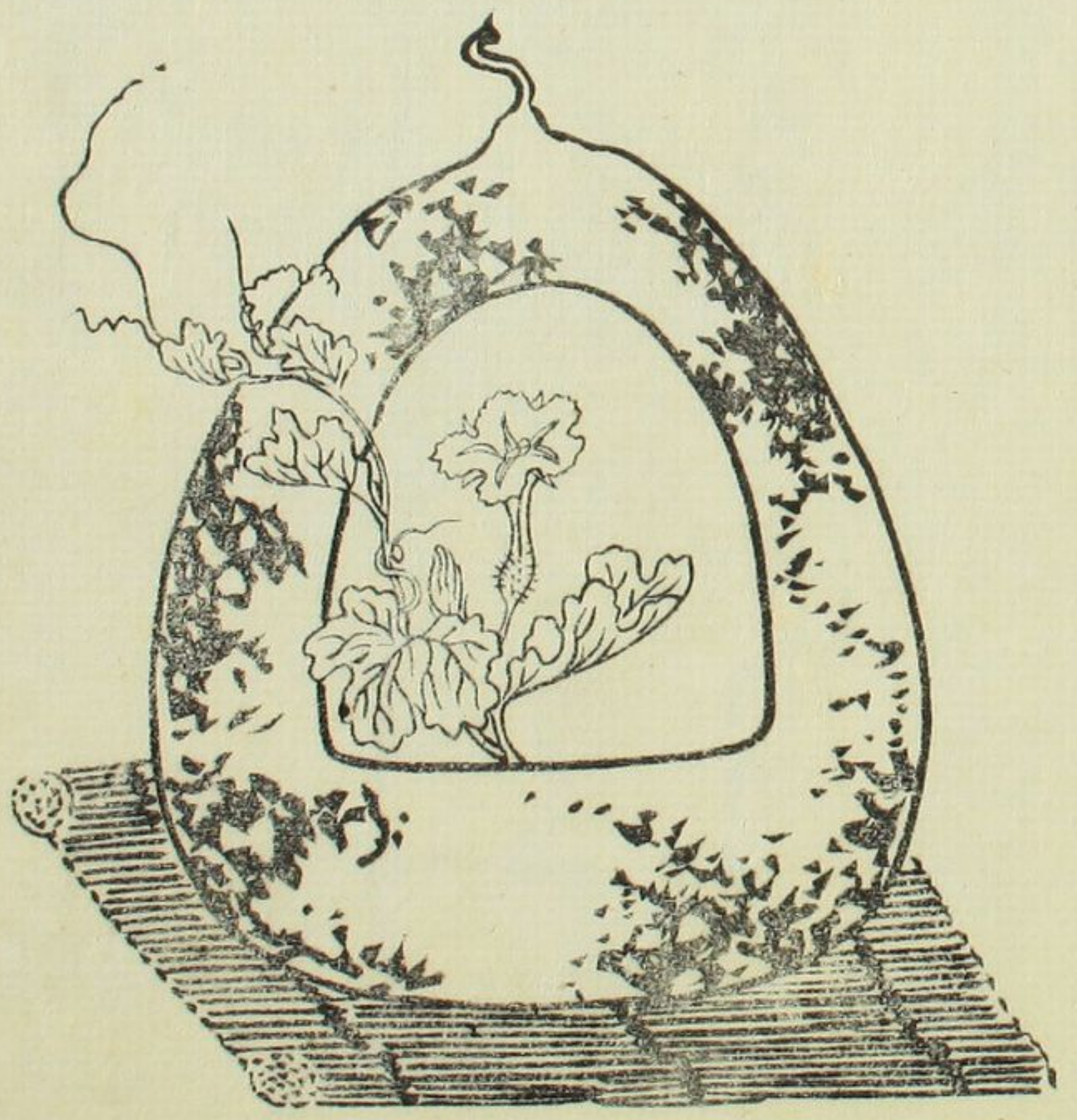


観菊
花器
水

石竹
花器



出糸
夕歌
な名執又瓢



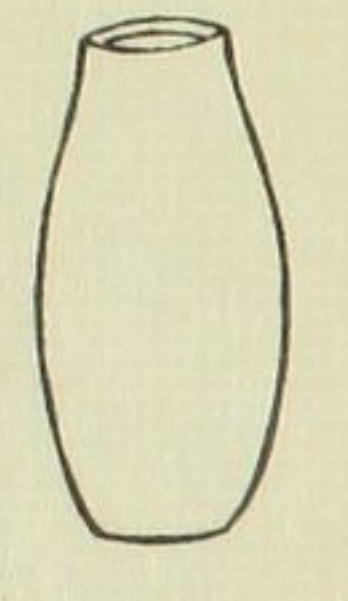
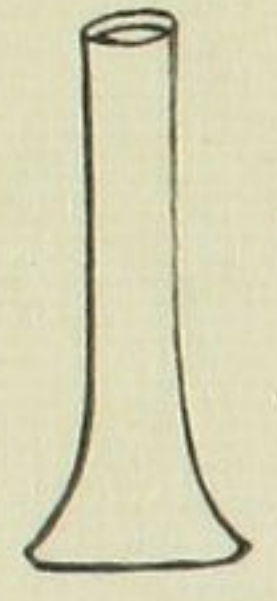
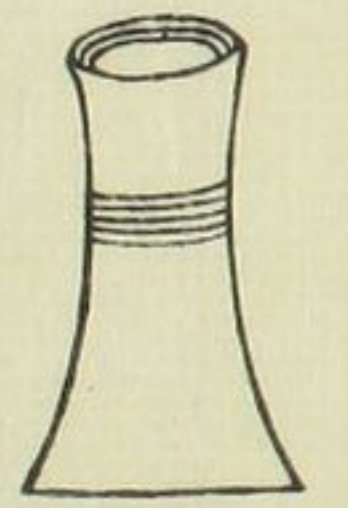
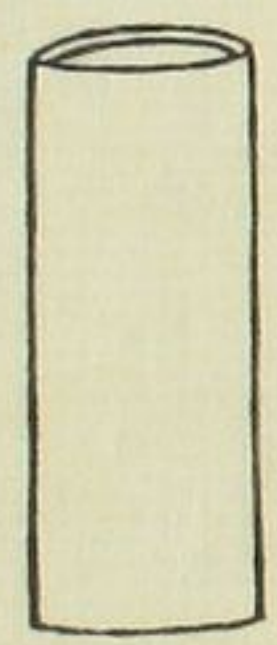
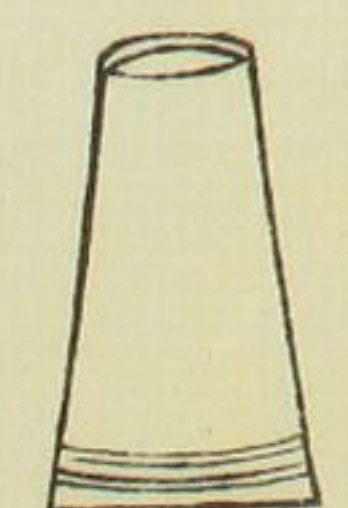

榎柳

如し舟にふもあしき
いろく阿の他さし
清を名柳て出た用
船にあさうひを付ても
ろくか

之重切
と連翹
中播
下水仙



源氏花巻平白糸乃内出瓶等不用行末形終よ交に果

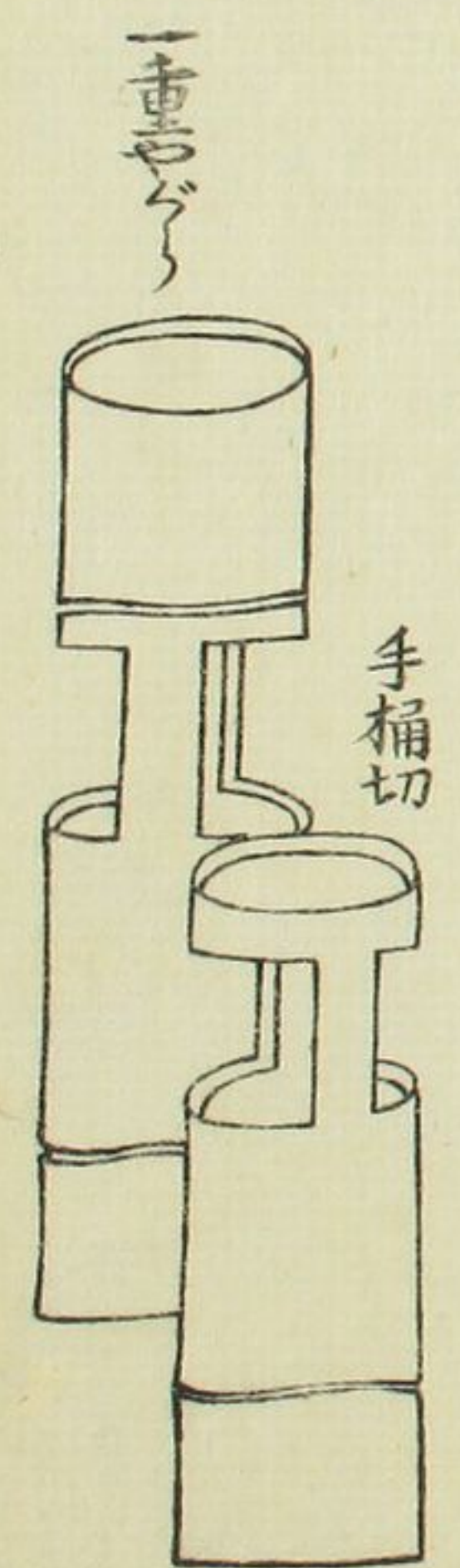
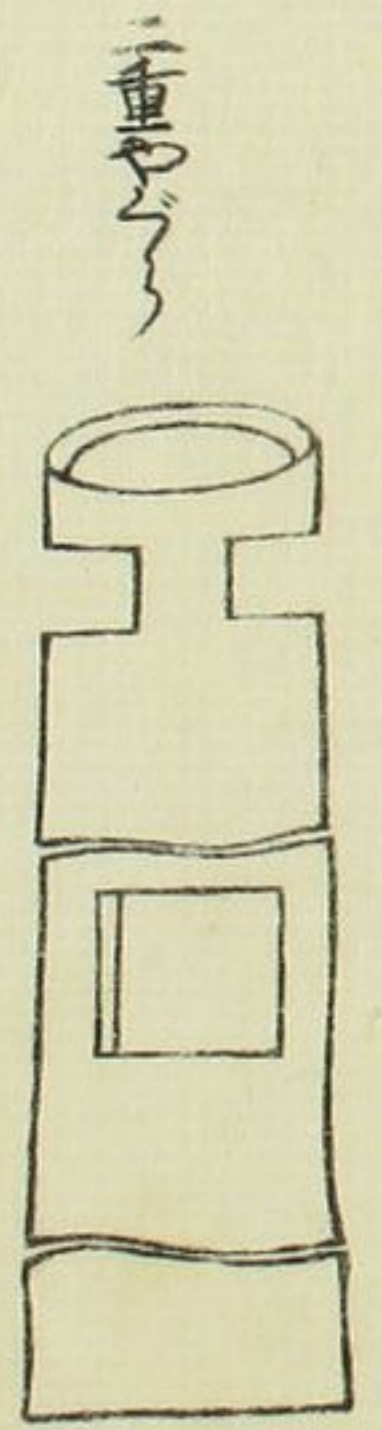
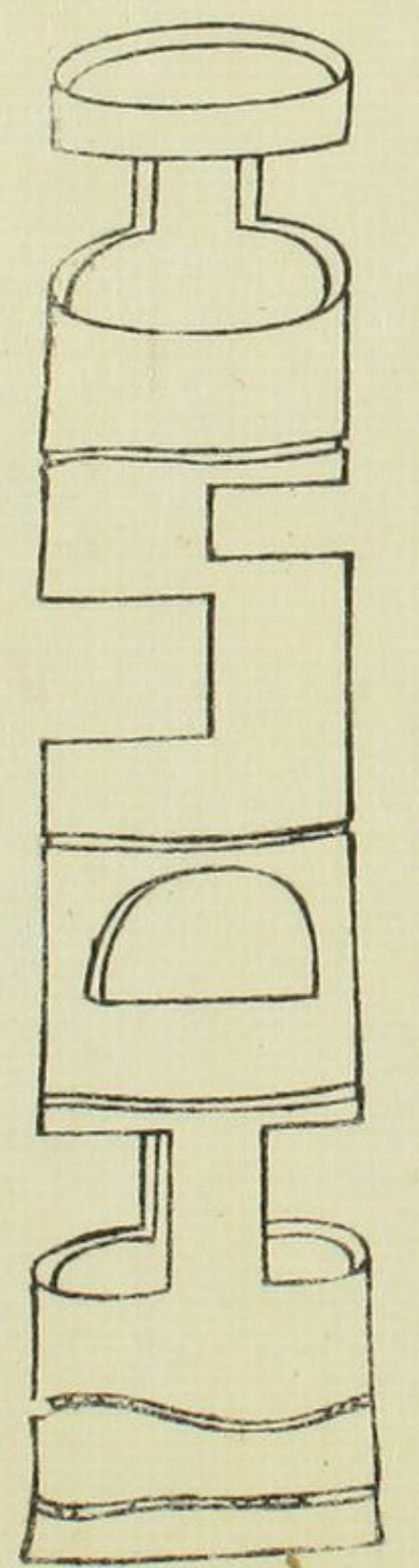
<p>桐壺</p> 	<p>御幸</p> 
<p>空蟬</p> 	<p>まき柱</p> 
<p>美濃</p> 	<p>胡蝶</p> 

源氏花巻の至意平白糸とも悉用一也日ありて金根桐狭竹本
陶器之等ありて其の形ハ杯事なるが如し其の器形も出た太
果也一其の至意のやけ一ありて院敷奇屋木至意古実寸法有

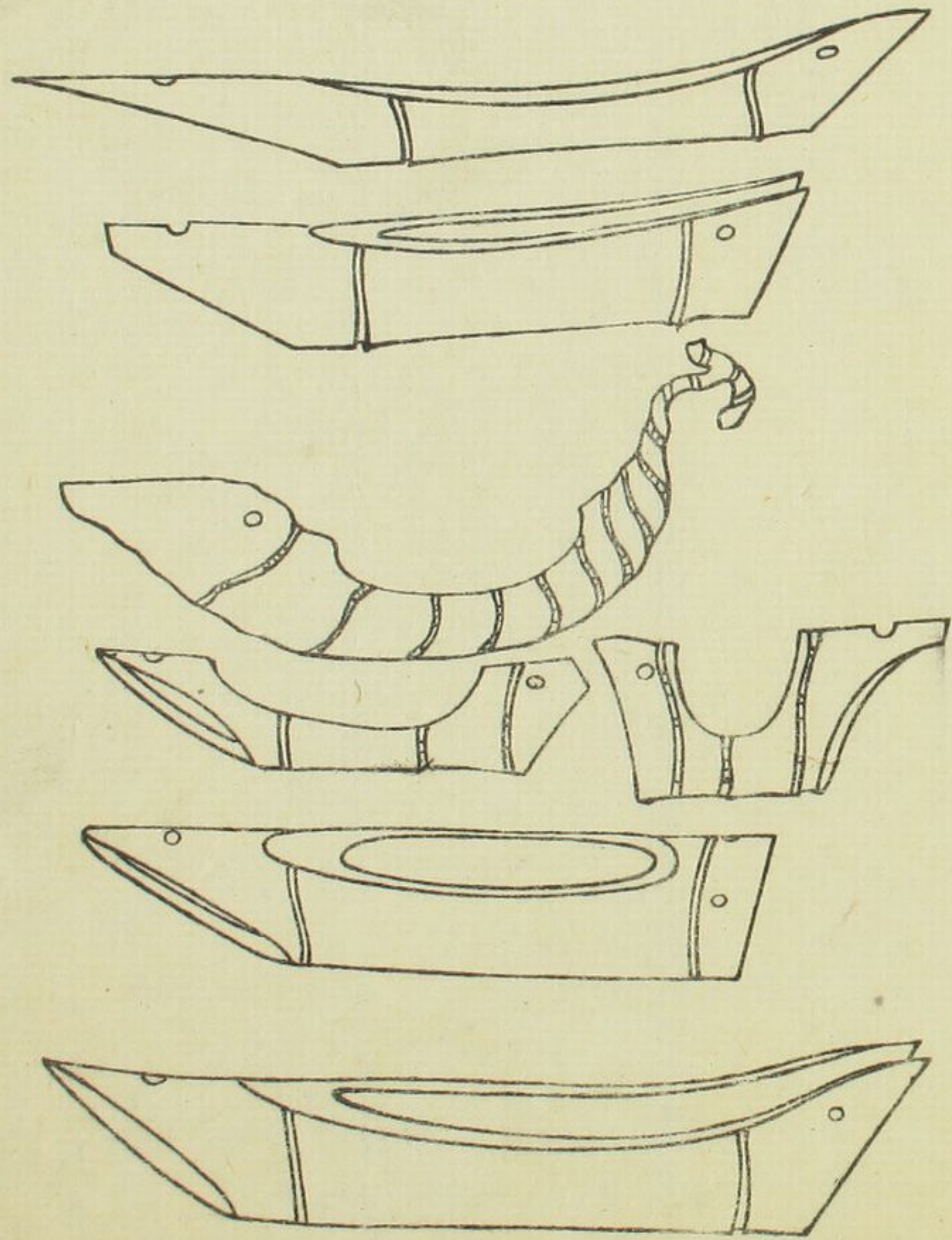


形丸 高九寸程
 如星也 意合 形と名付 手工 丈の形あり 或時 星中に
 浅沢乃 氣文と 眺望一見と 製を 活方と 定む 又
 樂焼よく 作る 門人 周徳と 京文と 京國 樂焼
 にも 用也 亦 焼の 意と 用 於り 性 若 あり 半る ねと 活 中 經
 しく 玄院乃 意入 少く 石持の人 希なる 形 變 古の ぬに 深 氏 傳
 花 雲の 形と 造く 也 用也 を 以 餘 流と 号 也 手 ぬ の 亦 燒 亦 乃
 入と 用也 亦 入り 活 意と 二 流 あり 松 木 手 用 於 亦 子 亦 似
 手 亦 あり 形 活 乃 世 不 弘 めん と 志 け 此 亦 あり あり 一と 手 意
 しく あり しく び 形 け 道 乃 形 け 傳 人 事 希 乃 しく

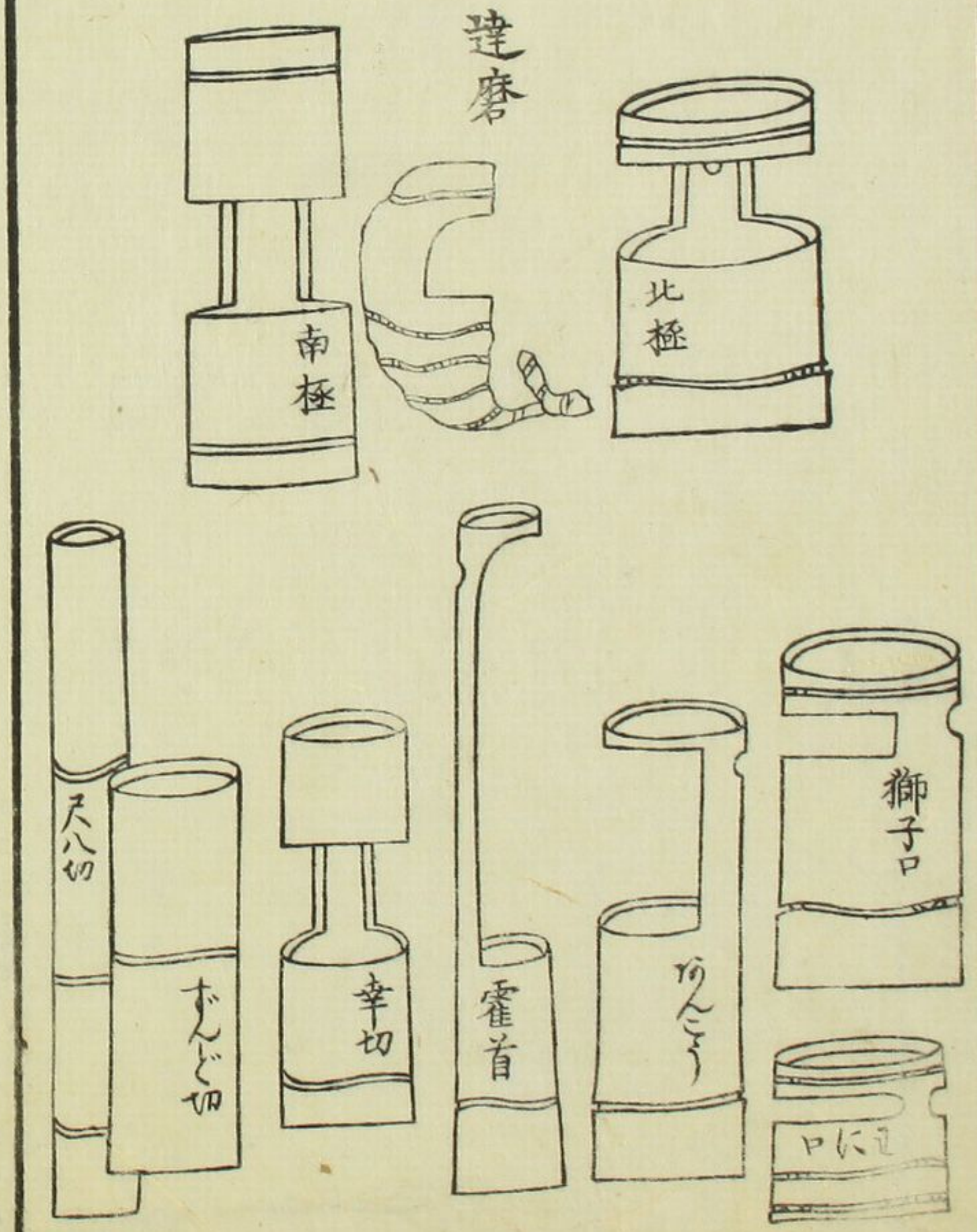
五重切



船



惣名三重切



枇杷

枇杷葉をとり小
つゝ小葉を生かす

枇杷葉をとり小
つゝ小葉を生かす



授桐

かのどらハ
出せり



かのどらハ
出せり



此根は天麻をわすけ大葉を
とてつふかを生ず

紫雲英

此の少葉あるは
多くは柳葉に
おてつふかを生
に叶はす法は元
二回



大輪菊

此花のびやうふつふかを生ず

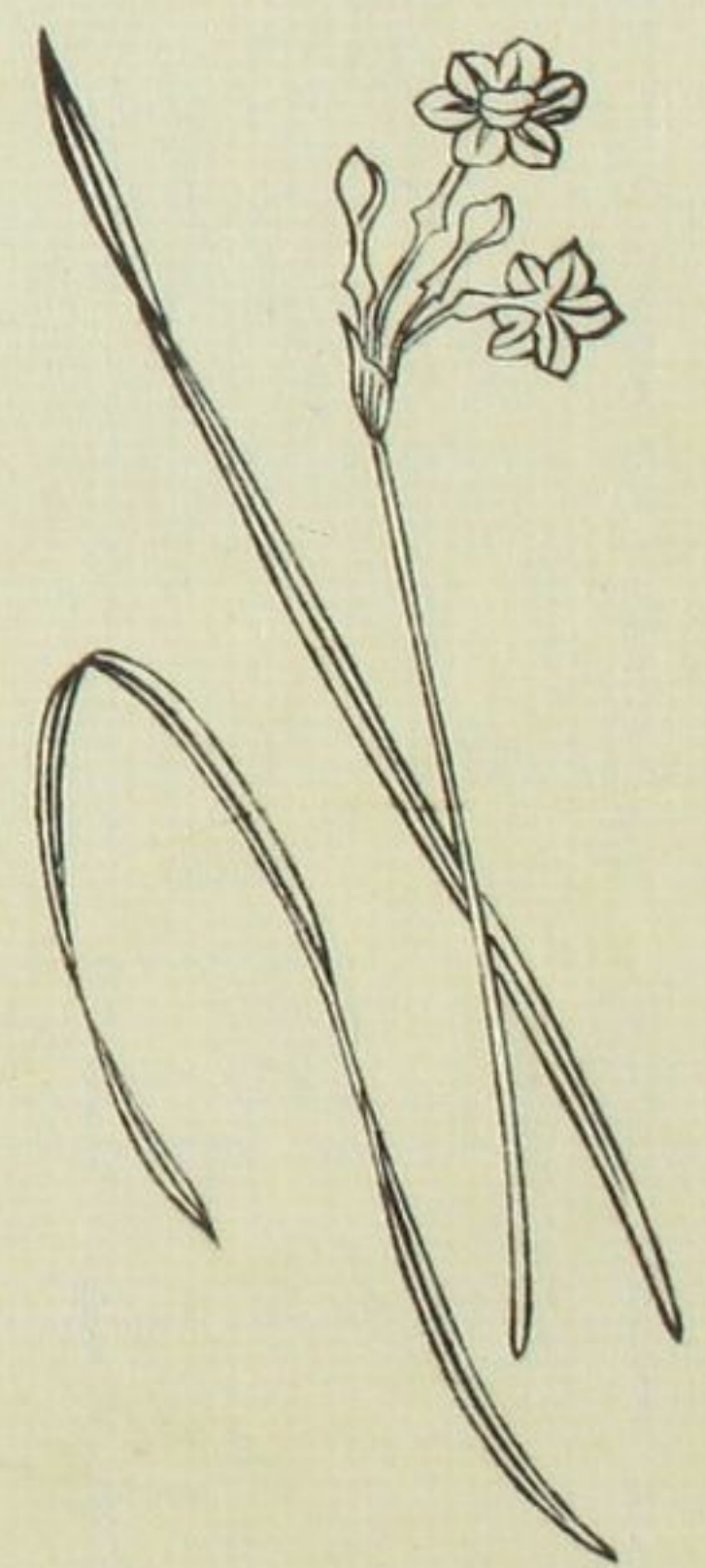
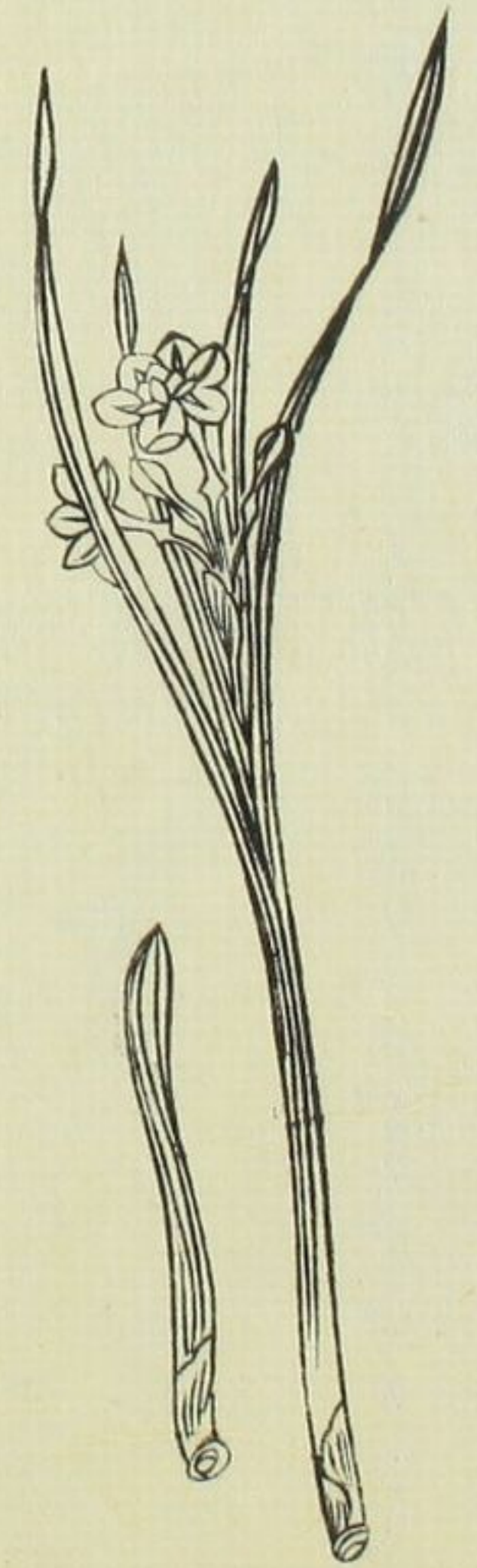
菊の産よりては首のひて
柳葉がより多き者程くつふ
てか出生に叶はす法は元
二回



水仙

春に咲く花と
五七にして
お生にさす

水仙は春の候よしてつよかき生
るうも花づつひよあはれあり
水仙は陰中の陰の花よき
にもあふも四六の教に生きたる
くはあふもあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ



胡蝶花 鳶尾

お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ



お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ
お生にさすよきあふもあはれ

万花千草といけりとも
指松粟粒の入敷といひ
つやのあまう御座りたる
るあり入く御座りして
神佛へ供へたりとあり
人倫の敬ぶべきあり
子万のむきとあり
幼幼ありとあり

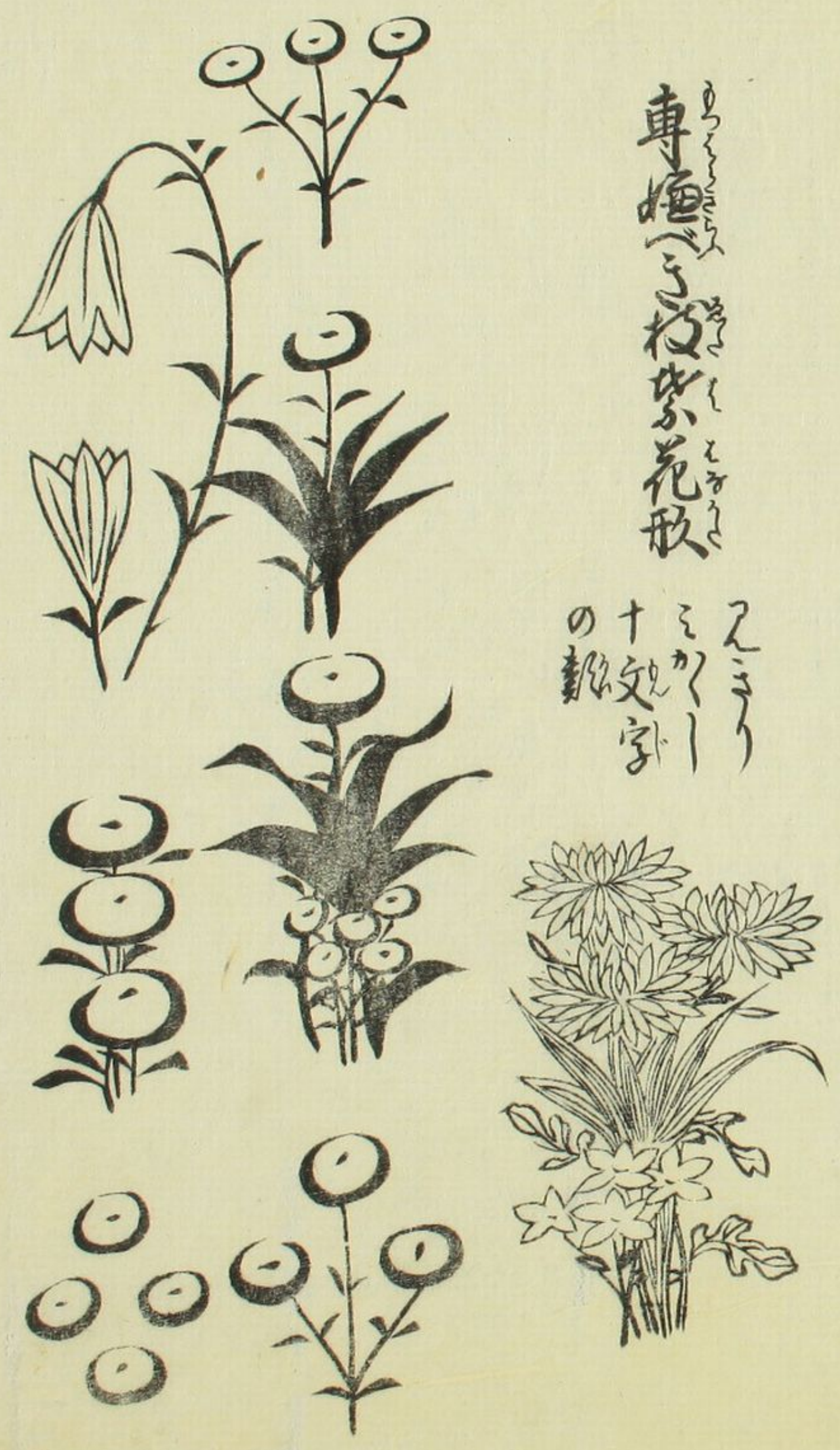


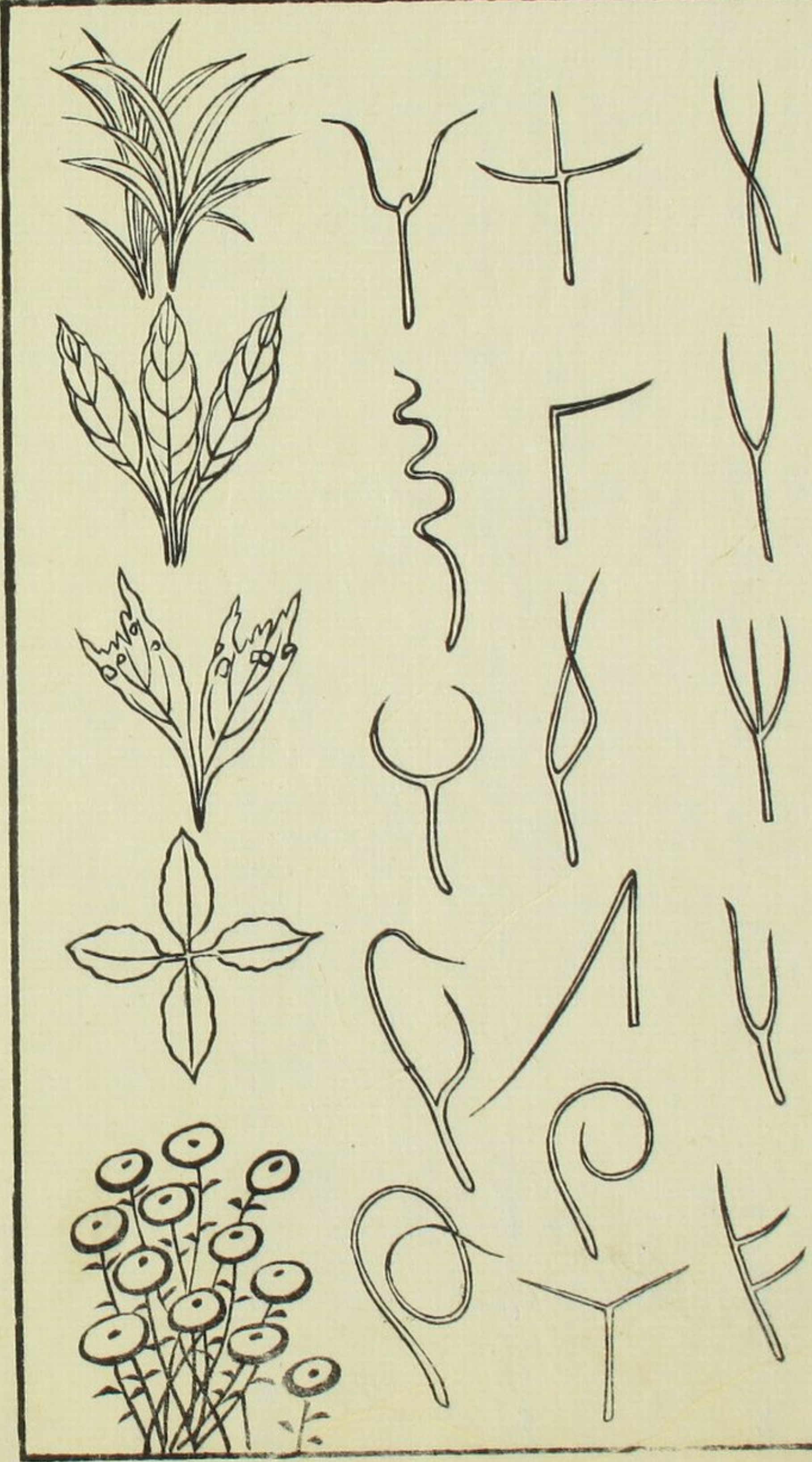
稻

麦

専横へは枝葉花形

えま
ろく
十文
の報





專可嫌花形亦也茶の事

書院白活花中絶して中流沿路利休より茶席よ少計むを
 いけりちと茶むろとて中流沿路の活茶いよとて今世人
 判然乃むと茶席の花の形をば知らず活茶は茶席の
 花とて中流沿路の形又草花の出生も且て今世人
 して右よまの出生不生の花形を画たよいむこの形を
 書一尺切見源一十文字のまじりかて形を破一並
 くく亦へ知る處あり

芍薬

せんたい 萩 尊尾

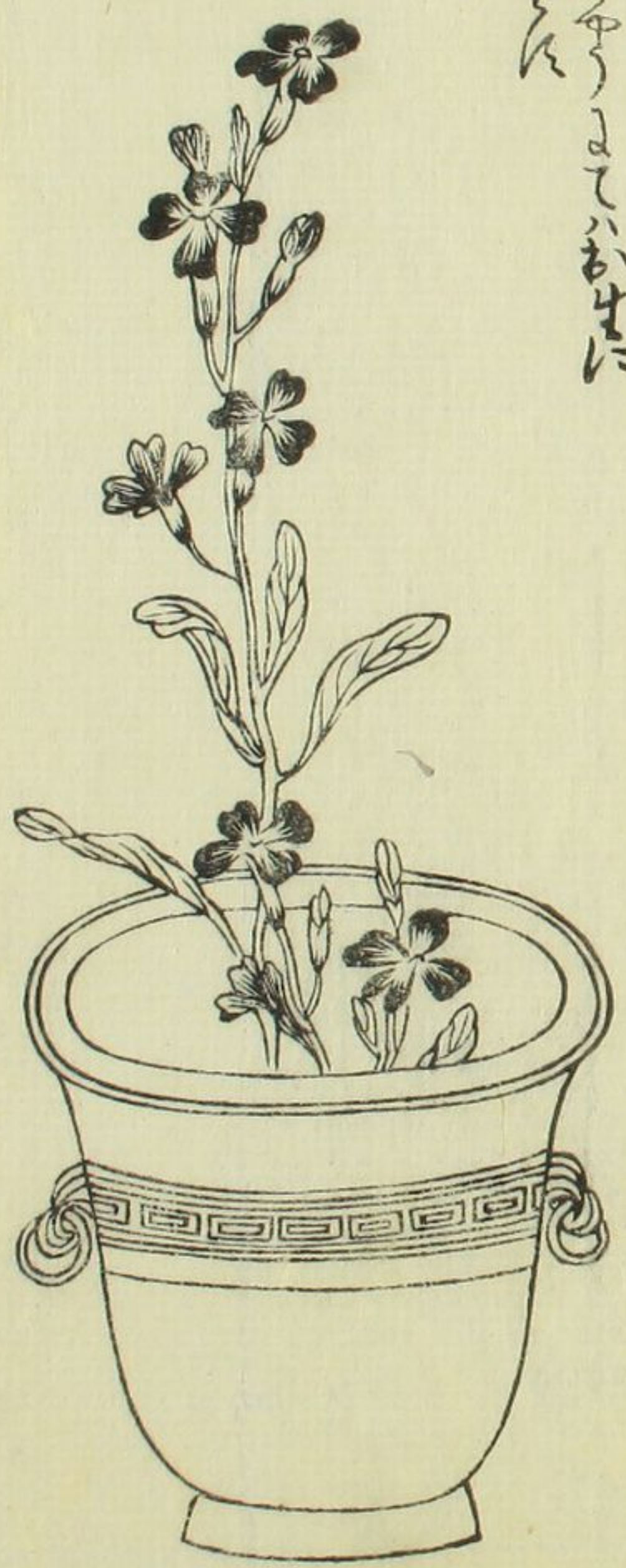
いけつかい すすり すすり
生花のむきよ 砂心 砂心
用々 用々 用々 用々
け け け け け け
二 二 二 二 二 二
一 一 一 一 一 一



紫羅蘭花

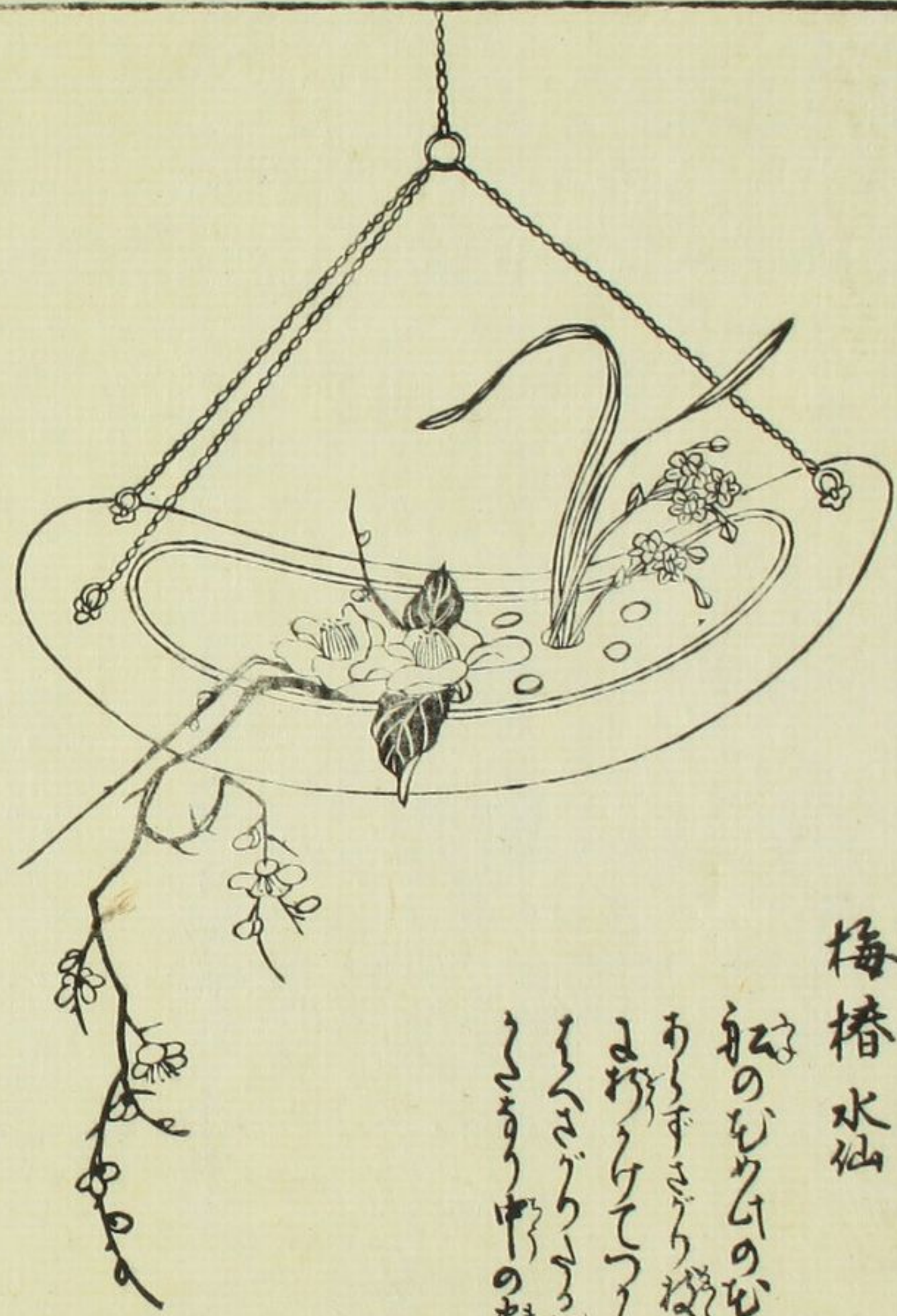
和名あり せいりあん

ゆげ 花 飯 細 火 折 あり
活 花 の 心 器 不 あり
も も ち ち ち ち ち ち
く かく かく



梅椿水仙

船のむかしは水仙のいけは
ありてはついでに梅と
椿とありてついでに
梅とありてついでに
梅とありてついでに
梅とありてついでに
梅とありてついでに



跋

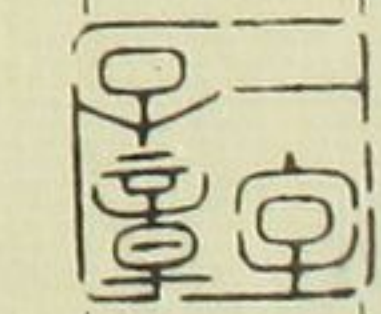
湖海菽浮山林郊野之間草木之多
甲冑皆泥其性而英華以再花結實
者亦不鮮也其是以東山水好以雅
之人折取其葉枝之艷絕乎者
來而投諸其席之瓶裏為用
悅目為神家之謂活花焉其術之

始實起子 东山相府公 相公極其
妙定其法也時者 千葉龍卜先生之
先現曰子其教以傳至于今也先生
姓平諱子業名胤綱字龍卜號松
明齋播磨赤穂之人也少喜遊仍
於大和撰津之官以廣其傳焉後奉
于京都而其在業愈不懈焉

先生之於活花也枝葉不矜不殺從
品者態而效之妙致而法居然在乎
山水之所見自然之風景其術以出
乎人之言之外為要矣余從子先生
而學漸獲其趣焉 先生居在
著其書一篇而示于門人遂上諸
梓以貽子後也於乞乎跋焉

昭和二年乙酉暮春二月

門人五陵柳島源吉俊



授合

東都

林華徑

丹羽墨川

和田雲阿

八幡春幾

益子沾千

後藤龍波

後編
後起

浪華

奥村峯柴

活花譜 下之卷

後編

源氏活花百瓶之圖

門人 全二冊
花形 出来

明和二年乙酉中秋望日 京都彫工田中平兵衛

東雲堂藏

京都堀川通錦小路上町

中川藤四郎

江戸本橋通一町目

須原屋茂兵衛

三冊
源氏

